鶴岡市立図書館・鶴岡市郷土資料館だより

やまびこ 特別号 381号



ご自愛足りていますか？

「ご自愛ください」

よく手紙やメールの結びの文として用いられる言葉です。どうか無理をせず、自分の身体を気遣ってくださいね、という意味の優しいこの言葉を自分へ向けてみたことはありますか？

忙しい毎日を過ごす中で、ついつい自分のことを後回しにしてしまうことはないでしょうか。「ご自愛」とは、漢字の意味をそのまま読むと、「自分を愛すること」となります。大切な人を愛するように、自分のことをしっかり愛せているでしょうか。様々な行事が続いて疲れが溜まりがちなこの季節を元気に過ごすために、大切な人を気遣うように自分のことを気遣ってみませんか。そんな時おすすめしたい「ご自愛本」を集めてみました。

寒くなり、体調が心配な方には、体を整えてくれるような料理や飲み物の本がおすすめです。温かいスープやハーブティーは、飲むと体が温まり、気持ちも穏やかにしてくれるのではないでしょうか。また、たまった疲れをとるという点では、毎日の睡眠できちんと回復することも大切です。ぐっすり眠るために少しだけ体を動かせるようなヨガの本や、睡眠の質を高めるための本もあります。そして、体だけでなく心も元気でいるために、自分の好きなことをすることや、あまり考え過ぎないことも時には大切です。特別なことをしなくても、毎日の生活の中で自分のための時間や手間をほんの少しだけ増やして、心や体が喜ぶようなことをちょっと意識して、日々頑張っている自分を労わってみましょう。

皆さまくれぐれもご自愛ください。



＝おすすめの「ご自愛本」＝

- 『心と体を楽にするアニール先生の「ゆるヨガ」７７』 アニール・Ｋ．セティ(2024)
- 『体調は血流が9割』片岡　夕美子(2026)
- 『疲れと女性のプチ不調』高尾　美穂(2026)
- 『無意識さんの力でぐっすり眠れる本』大嶋　信頼(2026)
- 『お茶の時間』益田　ミリ(2017)
- 『カップ一杯の魔法』しばた　みか(2022)
- 『一年中冷え知らずごはん』ワタナベ　マキ(2023)
- 『つかれたからだをいたわるご自愛おみそ汁』えちごいち味噌(2024)
- 『自分のために料理を作る』山口　祐加(2023)
- 『ごほうび美術の旅』らち　まゆみ(2025)
- 『わたしの１ケ月１０００円ごほうび』おづ　まりこ(2022)
- 『おつかれ、今日の私。』ジェーン・スー(2023)
- 『思わず考えちゃう』ヨシタケ　シンスケ(2019)

＝11月の記念日＝

ペンの日（１１月２６日）

一般社団法人・日本ペンクラブが、昭和 41 年（1966）に創立 30 周年を記念して制定。同団体の歴代会長に、島崎藤村、志賀直哉、川端康成、井上ひさし等がいる（日本ペンクラブ公式サイトより）。

図書館にある「日本ペンクラブ」編集本
・『１０歳の質問箱　なやみちゃんと５５人の大人たち』

令和８年１１月１日発行
鶴岡市立図書館・鶴岡市郷土資料館
〒997-0036
鶴岡市家中新町 14-7
（図）TEL：25-2525（郷）TEL：25-5014
FAX：25-2526

１１月の新着案内

リクエスト・予約開始は １１月１３日（金） です

◎小説・エッセイ

- 海辺のエール　（青山　美智子）
- これは経費で落ちません！14　（青木　祐子）
- 希望の子　（一穂　ミチ）
- 0秒前の彼女　（今村　昌弘）
- 神の庭付き楠木邸 13(えんじゅ)
- 令和元年生まれルリカ50歳　（王谷　晶）
- イクサヒメ　（大林　蒼平）
- アルゴリズムの査証（海堂　尊）
- 川崎警察遠雷雨　（香納　諒一）
- VS. シャングリラ　（櫛木　理宇）
- 切り札　（今野　敏）
- 中華食堂ひばり亭　（坂井　希久子）
- 追善　死の舞　（佐伯　泰英）
- チャンバラ　（佐藤　賢一）
- このスマホで地下牢獄から脱出してください　（知念　実希人）
- 英雄の悲鳴　（堂場　瞬一）
- 小さな故意の物語(東野　圭吾)
- 凍りつく夏　（伏尾　美紀）
- 柳橋の弥平次捕物噺1・2　（藤井　邦夫）
- 本屋さんのある街で(凪良　ゆう)
- オペラティオ　（真山　仁）
- 王国　（湊　かなえ）
- 人・で・なし　（宮部　みゆき）
- 尾崎世界観のおなやみ天国　（尾崎　世界観）
- あかつき便り　（川上　弘美）
- 虚弱に生きる　（絶対に終電を逃さない女）
- ま、さじ加減でしょ。（綿矢　りさ）
- ハウスメイド1～3　（フリーダ・マクファデン）

◎実用書

- ヘルマン・ヘッセがカレーライスを食べる話、ありますか　（神奈川県学校図書館員研究会）
- 乱読御免　（今村　翔吾）
- 嫌われおじさん愛されおじさん　（佐伯　ポインティ）
- 江戸時代がヤバい（宮田　和男）
- るるぶ　日本のユネスコ世界遺産・登録サイトをめぐる旅
- なんとなく「美術系に行きたい」と思ったときに読む美大入試完全ガイド　（河合塾美術研究所）
- 自閉スペクトラム症どうする思春期の性　（岡野　さえ子）
- 「うちの子、依存症？」と気になったら知りたいことが全部のってる本　（松本　俊彦）
- 高校生発！発明品・ご当地商　（三省堂編修所）
- 日本ご当地マンホール大全　（渡邊　文善）
- 建築設備図が読めるようになる本　（日本建築協会）
- 「味の素」の最強ブランディング　（勝沼　依久）
- 〈商用OK！〉布こものレシピ150＋3　（主婦と生活社）
- おうちでタコス！！(minokamo)
- 離乳食、なんで食べてくれないの？　（水野　千恵）
- 恐竜アート博物館（芸術新聞社）
- おつむの良い子は長居しない　（高嶋　政伸）
- 筋トレ解剖図鑑　（坂詰　真二）
- 杉山亮の鉛筆ゲーム大全集　（杉山　亮）

◎児童書

- こどもクリティカルシンキング　（渡辺　美智子）
- ポケモンサイエンスブックほのお　（店橋　護）
- すごすぎる夜空の図鑑　（藤井　大地）
- おうちでカンタン！おもしろ実験ブック天気の科学（寺本　貴啓）
- 隠れ最弱動物図鑑(今泉　忠明)
- すごすぎる体のつくり図鑑　（室生　暁）
- 絵でわかる建物の歴史　（エドゥアルド・アルタルリバ）
- 黒魔術師ガブリエラ ３　（長谷川　まりる）
- 怪盗クイーン　ヴェネチア・カーニヴァル　（はやみね　かおる）
- ハチミツとまほうの明かり　（茂市　久美子）

◎絵本

- うちゅうからきたミニミニうさぎ　（アレッシオ・アルチーニ）
- みつけてちょーだい(押本　達希)
- しずかなしごと　（織田　敦子）
- しゅつどう！しょうぼうこうくうたい　（鎌田　歩）
- ねえねえノンタン(キヨノ　サチコ)
- ライオンのおばけキャンプ　（さかとく　み雪）
- ワニのクロッカスむしばになる　（ロジャー・デュボアザン）
- まいごねこ　（殿本　祐子）
- 月夜のうさぎ　（刀根　里衣）
- ただしいおならのつかいかた　（なかつか　みお）

やまびこ号の次回巡回日は

月　　日です

新着図書は上記以外にもありますので、お気軽にお声がけください。
新刊は、ホームページでもご覧いただけます。

庄内藩における公武合体派と佐幕派のこと

従来、庄内藩の幕末政局は「公武合体派」と「佐幕派」の対立と論じられてきた。しかしながら、通史における研究成果と照らし合わせてみると、現在では、その捉え方は通用しなくなってきている。今回はちょっと固い話になるが、昨今の研究動向に合わせた、庄内の幕末維新史の最前線について論じてみたい。

そもそも「公武合体」の解釈について、安丸良夫氏は「公武合体論は、幕藩体制の危機に直面した封建的支配者が、幕藩体制の危機を回避し、その維持強化をはかろうとするイデオロギーであったが、このような公武合体論形成の独自な意義は、各藩が幕府を通じてであれ、皇室という『絶対理念』に連なることによって、自己の独自性を主張しはじめた」（「尊王攘夷運動と公武合体運動」『明治維新史研究講座』第3巻 歴史学研究会編 平凡社 1958 年）と定義している。この当時は、「藩政改革派の指導による幕藩体制全体の改革運動」として「公武合体」を把握するという見方が示されたが、その主体はあくまでも西国雄藩に限定されるものであったいえよう。

また、近年の定義として、三谷博氏は「大大名が「公議」の名の下、かねて志願の政権参加を実現しようとする一方、幕府はかつての栄光への復帰を渇望し、幕府専制への復古を目ざした。（中略）武家の側に注目して『一会桑』体制と呼ばれることであるが、全体を前後の時代と対比して見るならば、『公武合体』体制と呼ぶのが適切だろう」（『維新史再考』NHK出版 2017 年）と論じ、文久 3 年（1863）の「八月十八日の政変」で長州藩が京都を追われて以降の京都での政治体制を「公武合体」とした。さらに端的な定義として、篠崎佑太氏は「近年は、孝明天皇と結ぶ一会桑と、『公議』を求める薩摩藩や福井藩などという二つの『公武合体』路線の対立として描き出されている」（「一会桑勢力」『幕末維新史への招待』山川出版社 2023 年）と説明している。この場合の「公議」とは、「公議與論」とも呼ばれ、「世の多数意見」と「普遍的に妥当する正論」という二つの意味を持ち、「専制」を批判する言葉として用いられていることになる（前掲『維新史再考』）。

以上のような文脈の中で、いわゆる「丁卯の大獄」で処罰された大山庄太夫をはじめとする 30 数名が、「公武合体派」と称するに相応しいかとすれば、そこには少し無理があるだろう。何故なら、彼らは「一会桑」はもちろん、公武合体を唱える他藩の藩士と交流をもった形跡がないからである。たしかに、文久 3 年 6 月 20 日に大山庄太夫が江戸にいた上野直記に宛てた書状の中で「公武御合体、各国之諸侯も其実境ニ入、神州之御武威海外へ相震、中興之御大業も相開ヶ候御事に至らせらるべき」と記し、当時、長州藩長井雅楽の意見書「航海遠略策」を読み、「国論奮與之大論ニテ殆と感心仕候」と感激している。しかしながら、この「航海遠略策」は「（朝廷に対し開港通商を確定させた上で）朝廷主導で国是を定め、幕府列藩一同に徹底して、全国の人心を一和させる」というものであり（上田純子「長州藩の国事周旋と益田右衛門介」明治維新学会『幕末維新の政治と人物』有志舎 2016 年）、結局のところ、藩内はもちろん、朝廷や他藩有志にとっても不評を買い、長井雅楽も失脚を余儀なくされた。大山が感激した公武合体とは、近年の研究成果の定義における「公武合体」を指すものではない、大老井伊直弼による朝廷への無勅許条約調印に基づいた通商条約を前提にした「朝幕一致」という「公武合体」であり、それは異人嫌いの孝明天皇の意思に適うものではなかったわけである。

一方、「佐幕派」という言葉であるが、庄内藩の場合、「佐幕」である以上に、「譜代の家柄」という表現が相応しく思われる。つまり、酒井家は「幕府」ではなく、「徳川家」があっての酒井家という立場にあるという解釈である。もともと酒井家は「幕府」という執政機関に対し、七代の忠寄以外、老中を出さなかったという経過があった。これについては、「酒井家世紀」にある忠徳の逸話に次のようなやり取りが紹介されている。

> 公（忠徳）、嘗て井伊公を訪はれし時、越中守（松平定信）兎角我等と老中になれとて勧むれども、老中ハ小大名が才譖を以て勤る役柄なり。貴公並ニ我等の家柄にてハ。もし不軌を謀る者あらん時、先鋒となりて踏潰すべき心懸にて士気を引立てること第一なり、

要するに、老中は小大名の才覚で努めるものであり、酒井家はそのような家柄ではないとする立場である。主君がそうであれば、当然のことながら、家臣たちもそのような意識が働くことは自明であろう。宮地正人氏も『幕末維新変革史』上(岩波書店 2012 年)の中で、「譜代藩においては、藩主自身が将軍の家臣・家来なのであり、したがって藩士は将軍家の陪臣となる」（257 頁）と記しているが、慶応 4 年（1868）2 月段階で藩の首脳部が藩士たちに対し求めた意見書のうち、とりわけ服部十郎右衛門の意見書にその意識が色濃く反映している。

> （酒井家は）御譜代第一之御家柄ニシテ、斯ク危急之御時ニ当テ、天下ニ先テ大義を唱へ国力を尽テするの御計略を御廻らし遊ばれずハ、上ハ神祖在天之霊下ハ御祖宗之神霊に対し奉りテ、恐れながら御面目を失わされ候のみならず、末代史筆之表ニ於テも恥ヶ間敷候事、

つまり、酒井右京・酒井奥之助・松平舎人ら、藩主にも近い関係にある家老経験者たちであればなおさら、「譜代の家柄」に対する意識は強かったはずである。では何故、藩政改革を画策したのか。彼らの意見を代弁すれば、「藩政を蔑ろにしている大殿様（忠発）の側近たちを排除しなければ、将軍家に対し、面目が立たない。であればこそ、正しい政道に戻すべく、藩政改革を断行せざるを得ない」ということになろう。強調したいのは、不遇を託つ自分たちが表舞台に立つための手段としての藩政改革ではないという点である。実際のところ、酒井右京は事件が発覚してからの取調べ（「酒井右京御尋に付き申上候覚」）に対し、「権十郎殿出府後、以前承り候御政体筋共違ひ、追々御行直りの様承知仕り候テハ大ニ安心仕り」と述べている。権十郎らが江戸に出府するのは文久 3 年 11 月であるが、それ以降、江戸の幕閣と渡り合い、幕閣も庄内藩を頼りにしている状況を頼もしく見ていたからこそ、元治元年以降は表立った動きをする必要がなくなったことになる。

そもそも阿部正己が「公武合体派」と「佐幕派」と提唱したのは、昭和 9 年（1934）春から山形新聞に連載した「庄内藩幕末勤王秘史」の「三五 恭敬派放逸派の党争」からである。実際のところ、昭和 5 年（1940）に東京で開催された本人の講演会のメモには「公武合体派」「佐幕派」の文言は見当たらず、同じ年の 1 月 19 日に大宝館で開催された阿部の講演会を聞いた郷土史家の石原重俊の速記にも、「恭敬派」「放逸派」の文言はあっても、「公武合体」「佐幕」の文言は出ていない。要するに、連載を書き進めるにあたって、「恭敬派」＝「公武合体」、「放逸派」＝「佐幕」という構図で捉えるようになったと類推される。「公武合体」という言葉が取って付けたような言葉であることの証左として、大瀬欽哉の「大山庄太夫一件メモ」によれば、「阿部先生は公武合体を企てたもので、勤王であるとした。『荘内藩幕末勤王秘史』とした。関係遺族は小躍して喜んだ」とある。これを読むに、阿部正己自身、「公武合体」という概念を深く理解していたわけでもなく、また、「皇国史観」という歴史観が隆盛を極めていた当時の歴史界では、そもそも「公武合体」についての研究は未熟だったわけである。であるのに、大山庄太夫一件は「公武合体派」と「佐幕派」の対立ということが当地では長年罷り通ってきた。そもそも、幕末期の庄内藩の政局に対立があったと考えることに無理があったわけだが、この説明については、字数が尽きたので、この辺りで筆をおく。（今野 章）